

## 平成二十六年入学式式辞

本日ここに平成二十六年入学式を挙行いたしましたところ、来賓の方々、および多数の保護者の皆様のご列席をいただき、誠にありがとうございます。

そして本日、ただ今この長野北高校への入学を許可された新入生の皆さん、入学おめでとうございます。入学試験をクリアされ、皆さんに入学の祝辞を述べることができますことは、私ども教職員一同にとりまして望外の喜びであり、光栄であります。皆さんの心の中に受験という一つのハードルを越えた嬉しさと、新しい高校生活への期待と、少しばかりの不安を胸にこの式に臨んでいることと思います。

さて、人生の不可思議さと喜びは「出会い」にあるといえましよう。今この式場である体育館は、そういう出会いの場でもあります。お互いに昨日までは見知らぬ仲であつた諸君が多いでしよう。そういう無縁の間柄でありましたが、本日この日から同じ教室で学び、同じグラウンドで手を取り合う仲間となります。必ずや皆さんは不思議な縁に結ばれて、生涯の友となるべき人を見出すこととなるでしよう。そういうありがたい縁を結びせていただいたことを皆さんも私ども教職員も共に大切にしたいと思います。

ここで私は皆さんに、高校生としてのスタートラインに立つて二つのことをお願いしたいと思います。

まず一つ目は甘えの心を持たないで頂きたいのです。諸君には耳慣れない言葉

ですが、「稚心を去れ」ということです。稚心の稚は幼稚の稚という字で、稚心とは幼い心という意味です。この言葉は、幕末の志士、橋本佐内 という人が十五歳で元服したとき、学問の道に進もうと志を立てて書いた「啓癸録」という書物に出てくる言葉です。彼はその中で「十五歳になって学に志し、自ら併癸していこうとするものは、この甘えの心を捨てなければならぬ」と書いています。確かに幕末と現在では十五歳という年齢の社会的立場はかなり違うとはいえ、義務教育を終え、高等学校の勉強を始めようとする皆さんには、この十五歳のときの橋本佐内の心意気をわがものとして考えていただきたいと思います。甘えの心とは、何かをしているときに、それを周囲や社会のせいにしてしまおうのも典型

的な甘えの心です。自分を厳しく鍛錬する心を忘れないでください。

次に二つ目は「初心忘れべからず」です。これは、室町時代の有名な能学者、世阿弥が言った言葉です。皆さんが今日この気持ちを持ち三年間持ち続けたら、長野北高校は素晴らしい学校になる。それはとりもおさず、皆さんが素晴らしい人間になることを意味します。

これから三年間にはつい気が緩んで、いいかげんに過ごしている自分に気づく時があると思います。そんな時、「初心忘れべからず」という言葉を思い出してください。

重ねて申し上げます。第一に「雑心を去れ」、第二に「初心忘れべからず」、この二つを折に触れて思い起こして下さい。

い。それはいつの時代になっても、人間が  
生きていくうえで、欠かすことのできな  
い心構えとっていていいでしょう。どうかそ  
ういう心構えを忘れずに、今日のこの良  
き日、朝日に匂う桜花のようなすがし  
く美しい心を持って、しっかりと、たくま  
しく、頭をあげ、大地を踏みしめ、高校  
生活の第一歩を踏み出してください。こ  
れこそが、これまで皆さんを大切に育て  
てくださった保護者の方々の労苦に報い  
る道であることを胸に刻んでおいてくだ  
さい。

最後になりましたが、保護者の皆様  
に申し上げます。あらためてお子様のご  
入学を心からお祝い申し上げます。私  
ども教職員一同、心血を注いでお子様  
の教育に力を注ぐ覚悟でございます。ご

家庭におかれましても、どうか学校と歩調をあわせてご協力のほどお願いいたします。ご意見やご希望がございましたら、何なりとお聞かせいただきますよう、またいつでも学校のほうにおいていただきまして、私どもとご歓談いただければ幸いです。

ご多用中にも拘わらずご臨席いただきまして、本日の入学式を盛り上げていただきましたご来賓、及び保護者の皆様に、厚くお礼を申し上げますとともに、本校の発展のため今後ともご鞭撻、ご支援賜りますようお願いも申し上げます。まして、私の式辞といたします。

平成二十六年三月八日

大阪府立長野北高等学校

校長 大門雅人